

招魂祭は、現在の護国神社が招魂社と称していた1939（昭和14）年以前に、戦争などにより死去した軍人らを慰靈する目的で執り行われた祭事である。日清

戦争や日露戦争などの折にその始まりは戊辰戦争前後に諸藩で行われた戦没者慰靈である。

青森県域においても、同

没者64名の招魂祭が行われた。弘前熊野宮（現熊野奥照神社）宮司長利薩摩の主管により実施されたこの招魂祭は、領内の神職を多数

8月、青森でも招魂社を創建する動きがあった。同社の神主の長利伴男は、建設地や建物の構造等について藩に問い合わせをし

青森ではその後も、1879（明治12）年2月に善知鳥神社で西南戦争戦没者の招魂祭が行われるなど、頻繁に招魂祭が行われた。

不明だが、結局招魂本社で

祭が行われていた。弘前藩では、1869（明治2）年6月、弘前の宇和野（現在の弘前市小沢・大開地区周辺を指すといわれる）に

5月には、大星場に招魂堂が建てられ、上記の293名が合祀された。

弘前藩による戦没者慰靈の動きはこれとどまらない。1870（明治3）年8月、青森でも招魂社を創建する動きがあった。同社の神主の長利伴男は、建設地や建物の構造等について藩に問い合わせをし

ばれたと考えられる。

し青森において死去した他の軍兵18名の計293名を慰靈した。これに先立つ

年5月に広田神社（当時は現在の青森市役所敷地の一部にあった）で行われた招魂祭が、青森で最初の招魂祭となつたようだ。同社には前述の他藩の戦没者のう

ち薩摩・長州・水戸の藩士など16名が埋葬されており、その関係から祭場に選ばれたと考えられる。



1885（明治18）年11月15日、
造道練兵所で行われた招魂祭の様子を描いた図（青森県立郷土館蔵）

（県民生活文化課
県史編さんグループ非常勤嘱託員）

動員した大規模なものであつた。さらにその翌年9月には、同地付近の大星場（砲術訓練所）で再び招魂祭が

10月に行われ、11月に原別野（現青森市原別）に決定した。これにより、青森の招魂社が本社に位置づけられることとなつた。

翌年から箱館戦争戦没者の招魂祭は毎年5月18日に造道練兵所で行われた。この段階で原別野の本社は完成しておらず、招魂祭は弘前で行われた。資料の関係かその後の動きは

青森の招魂祭

鳴谷 大輔

1885（明治18）年11月に善

知鳥神社で西南戦争戦没者の招魂祭が行われるなど、頻繁に招魂祭が行われた。

1885（明治18）年11月に造道練兵所で行われた招魂祭では、芝居小屋や競馬などの娯楽施設も見られ、多くの参拝者で賑わつてい

た。当初は前日に宵の祭り

として行われていた競馬などが、当日に見られるようになつておらず、招魂祭は弘前で行われた。資料の関係かその後の動きは